

# 英語中間態構文のアスペクトの二重性について

高 尾 享 幸

## 1. 序<sup>(1)</sup>

英語には以下の例の様な中間態 (middle voice) と呼ばれる構文がある。

- (1) a. She doesn't frighten easily.
- b. The food heats more uniformly.
- c. His letter reads stark and bald as time tables.
- d. The soup eats like a meal.

この構文はさまざまな構文特有と見える統語的、意味的特徴を示し、そのため、異なる理論的観点からの関心を集めている。この小論では、この構文のアスペクトに関する性質について考察する。一般に、英語の中間態構文のアスペクトは状態に分類される。この点で、対応する能動態構文や受動態構文とは異なっている。この論文では、確かに英語の中間態構文は(少なくとも典型的には)状態 (state) を表すものであるが、同時に非状態的なアスペクトの性質も併せ持っていることを示したい。そして、このアスペクトの二重性は、この構文の意味機能に原因があることを主張したい。中間構文は主語名詞句により指されている対象の恒常的属性を表現するものであるが、その属性は動作主が行う行為の中で知覚されるものに限られる。この性質、すなわち、行為の中で知覚される恒常的属性を表現するという構文の機能が、英語中間態構文のアスペクトの二重性を生み出していると考えられる。

次の2節ではこれまでの研究の中で指摘されている中間態構文が状態であることを示す事実群を概観する。続く3節では、中間態構文が非状態的な側面を持っていることを示す事実が複数存在していることを示す。併せて、中間態構文が二重のアスペクト構造を持つことを論じる。さらに、このような複雑な意味構造をこの構文が持つ理由について考察を加える。最後に4節において結論を示す。

## 2. 英語中間態構文の状態性

英語の中間態構文がアスペクトの点で状態的であるということを示すさまざまな事実が、これまでの研究において指摘されている。たとえば, Keyser & Roeper (1984) は, 下の (2a, b) の例を挙げて, この構文に対し特定の一時点にのみ結びつけられる解釈を与えることが難しいと述べている。<sup>(2)(3)</sup>

- (2) a. ?At yesterday's house party, the kitchen wall painted easily.

(Keyser & Roeper 1984: 384)

- b. ?Yesterday, the mayor bribed easily, according to the newspaper.

(Keyser & Roeper 1984: 384)

*paint* や *bribe* という動詞の語彙的アスペクトは出来事 (event) に分類される。したがって, 中間態構文を離れたところでは, これらの動詞は特定の一時点に生起した出来事を表すことができる。

- (3) a. Mom painted the kitchen wall yesterday.

- b. They bribed one of the prison guards yesterday.

他にも, 中間態構文は進行形にすることができないとの指摘がなされている。<sup>(4)</sup>

- (4) a. \*The walls are painting.

(Keyser & Roeper 1984: 385)

- b. \*Bureaucrats are bribing.

(Keyser & Roeper 1984: 385)

進行形での生起ができないことは, 典型的な状態動詞にも見られる特徴である。たとえば, 動詞 *know* は進行形にできない (Lakoff 1970, Dowty 1979)。

- (5) \*I am knowing that Bill went there.

(Lakoff 1970: 121)

もちろん, 非状態的な動詞にはこのような制限は見られない。

- (6) a. I'm looking at the picture.

(Lakoff 1970: 121)

- b. John is building a house. (Dowty 1979: 55)

中間態動詞 (middle verb) と語彙的狀態述語との平行性を示すもう一つの事実として、知覚動詞 *see* の補部における生起可能性が挙げられる。(7a, b) の示すように、中間態構文と状態節 (stative clause) のいずれもが、この統語環境に生起できない。

- (7) a. \*I saw the floor wax easily. (Keyser & Roeper 1984: 386)  
 b. \*I saw Mary tall. (Keyser & Roeper 1984: 386)

他方、非状態節は *see* の補文として生起可能である。

- (8) I saw Mary leave. (Keyser & Roeper 1984: 386)

上記 (7a) が不適格になるのは、中間態構文が視覚を表す *see* の補文に生起したためであって、埋め込み文の位置一般に中間態構文が生起できないためではない。事実、中間態構文は埋め込み文にも生起できる。

- (9) I believe the floor to wax easily. (中右 1991: 60)

Roberts (1987) は、中間態構文とそれが共起する表現とが指定する時間に関する関係について、この構文が状態節と共通する解釈を持つことを指摘している。まず、埋め込み文として生起した場合、中間態構文と状態節とは主文が表す出来事との時間的な関係について同じ特徴を示す。(10) が示すように、非状態節が埋め込み文として用いられた場合、それは主文の指定する出来事よりも時間的に先行する出来事を表すと解釈される。

- (10) John said Mary left. (Roberts 1987: 196)

この文では、メアリが去ったのはジョンがそのことを言ったよりも前に起こったということが意味される。それに対し、次の (11a, b) では、埋め込み文が表す状況は主文が表す出来事よりも先行する時間に成り立つだけでなく、それと同じ時点にも成り立っているという意味に解釈される。

- (11) a. John said chickens killed easily. (Roberts 1987: 198)  
 b. John said Max knew the answer. (Roberts 1987: 196)

(11a) では, *said* の補文である中間態構文が表す状況は主文の出来事 (つまり, ジョンによる発言) よりも前に成り立っていることに加え, 主文の出来事が起こった時にも引き続き成り立っているという意味を表す。同様に, (11b) でも, 埋め込まれている状態節の表す状況は主文の出来事が起こる前から成立しており, 主文の出来事が起こった時にも継続して成立していると解釈される。いま, 主文が表す状況を MC, 埋め込み文が表す状況を SC,  $p$  が  $q$  に時間的に先行しているという関係を  $p > q$ ,  $p$  が  $q$  に時間的に先行し, かつ,  $p$  が  $q$  と時間的に重なっていることを  $p \geq q$  と表すことにしよう。これにより, (10), (11a), (11b) の主文と埋め込み文の時間的位置関係はそれぞれ次のように表される。

- (12) a.  $SC > MC$   
 b.  $SC \geq MC$   
 c.  $SC \geq MC$

このように, 中間態構文は状態節と表される状況の時間にかかわる意味解釈においても共通した特徴を示す。

同じことが, ある時点を示す副詞句と文の時制との間に見られる意味的關係からも言える (Roberts 1987)。次の三つの例を比較してほしい。

- (13) a. John visited China last year. (Roberts 1987: 197)  
 b. John knew the answer last year. (Roberts 1987: 197)  
 c. Last week, chickens killed easily. (Roberts 1987: 198)

(13a) は非状態的なアスペクトを持つ例である。この文で, 副詞句 *last year* が指定する時間と文の過去時制 (つまり, *John visited China*) により指定される時間との長さを較べると, 文の過去時制により指定される時間は *last year* が指定する時間の一部となっていると解釈される。一方, 状態的なアスペクトを持つ (13b) では, *last year* が指定する時間の方が文の過去時制 (つまり, *John knew the answer*) が指定する時間の一部となっていると解釈される。(13c) は中間態構文であるが, この点において状態節と同じ特徴を示す。すなわち, (13c) では, (13b) と同様, *last year* の指定する時間は文の過去時制が指定する時間の一部になって

いると解釈される。したがって、今の点に関しても、中間態構文は状態節と意味解釈上の特徴を共有しており、非状態節とは対立する。

これまで見てきた証拠から、中間態構文は状態的な意味を表すということがわかる。このことは、中間態構文に生起する動詞はこの構文以外の統語的環境では一般に非状態的な意味を持つ (Hale & Keyser 1987, Tenny 1987) ということを考えると興味深い。本来は非状態的な意味を持つ動詞を主動詞とする中間態構文が状態的な意味を持つという事実に対して、これまでもいくつかの分析が示されている。たとえば、Roberts (1989) は、時制を担う動詞は時制に対し時間的に依存する場合とそうでない場合とを区別し、この区別に対応して動詞が出来事として解釈されるか状態として解釈されるかが分かると論じている。これによれば、非状態動詞は時制に時間的に依存しているのに対し、状態動詞と中間動詞とは時制に時間的に依存していないということになる。さらに、Roberts (1989) は動詞が時制に時間的に依存するかどうかを決める要因の一つとして、動詞と Tense とに同一の指標が付与されているという条件を立てている。指標の付与は随意的な統語操作であり、文の統語構造内にある Tense と動詞に対し自由に付与できる (あるいは、付与しないでおくことができる)。ただし、Roberts (1989) によれば、状態動詞はほかのものに時間的に依存することができないとされる。したがって、状態動詞は内在的に状態動詞としての性質を備えているが、非状態動詞は内在的には出来事の意味を持つか、状態の意味を持つかは決まっていないということになる。<sup>(5)</sup>非状態動詞は Tense との間に同一指標が付与されれば出来事の意味を持つことになり、Tense との間に同一指標が付与されなければ、状態の意味を持つことになる。このように考えれば、中間態構文において非状態動詞が状態の意味を持つのは、Tense と同じ指標が付与されていないことによると分析することができる。

Roberts (1989) の分析は、非状態動詞のアスペクトが語彙的には中立的であり、統語論における Tense との同一指標の付与の有無により決められるということを意味しているように思われる。もしそうであるならば、彼の分析には問題が残る。なぜなら、動詞の語彙的アスペクトは上の (10), (11), (13) で見たような文の意味解釈だけでなく、さまざまな文法的な可能性にも影響を及ぼすからである。この点について、次節で具体的に考察することにした。

### 3. 英語中間態構文に見られる非状態的特徴

動詞の語彙的アスペクトが文の統語的可能性を (部分的に) 決定することはよく知られている (例えば, Carlson 1981; Dowty 1979; Foley & Van Valin 1984; Lakoff 1970; Tenny 1987, 1994; Van Valin & LaPolla 1997; Van Voorst 1988)。この考え方が示すように、動詞がどの類

の語彙的アスペクトを持つかによって、その動詞を主動詞とする文が特定の統語形式を取れるかどうかが変わる。このことは、中間態構文の統語的可能性について興味深い問いを提起する。前節で触れたように、中間態構文に生起する動詞は単独では非状態的なアスペクトを持つにもかかわらず、中間構文全体では状態的な意味が表される。このような場合、中間態構文では語彙的アスペクトにより左右される統語的可能性はどのようなになるのだろうか。もし、Roberts (1987) の分析にあるように、この構文の動詞のアスペクトが統語論において状態的と決められるのであれば、この構文では非状態動詞にしか許されないような統語形式は生起できないことになる。一方、中間態構文においても動詞の語彙的アスペクトは変わらないのであれば、中間態構文にも非状態的な動詞とのみ共起する統語形式が現れることになる。以下では、中間態構文でも動詞は非状態的な語彙的アスペクトを保持していることを支持する事実があることを示していきたい。

最初に、Van Valin & LaPolla (1997: 95) がペースの副詞 (pace adverbs) と呼ぶ副詞との共起可能性について考えてみよう。このタイプの副詞は出来事が進展する速度について叙述する働きを持ち、*quickly*, *rapidly*, *slowly* などがこの類に入る。このタイプの副詞は、次の例にあるように、状態動詞と共起できない。

- (14) \*John quickly resembled his brother.

一方、(達成 (achievement) を除く) 非状態動詞は、ペースの副詞と共起可能である。

- (15) a. The snow is melting quickly.  
b. He talked slowly.

(15a) で用いられている動詞 *melt* は遂行 (accomplishment) であり、(15b) の動詞 *talk* は活動 (activity) に分類されている (Van Valin & LaPolla 1997: 94)。これらは共に時間の経過に沿って展開する出来事を表しており、*quickly* や *slowly* といった副詞は出来事の進展のペースについて叙述している。上の (14) で見たように、状態動詞がこれらの副詞と共起しないのは、状態の概念は時間の経過に沿った進展という構造を持たないためである。

中間態構文は、構文全体で状態を表していながら、出来事のペースを指定する副詞と共起することができる。その例を以下に示す。

- (16) a. The chairs fold up quickly. (Fellbaum 1985: 24)

- b. The book reads slowly. (Smith 1972: 104)  
 c. This applesauce will digest rapidly. (van Oosten 1977: 462)

第二に、頻度 (frequency) を表す副詞との共起を考えてみよう。この副詞は, *always, often, sometimes, rarely, never* などのように、特定のタイプの出来事が生起する頻度について叙述をする働きをする。次の例が示すように、この類の副詞は恒常的な状態を表す述語と共起できない。<sup>(6)</sup>

- (17) \*John is {always/often/sometimes} tall.

それに対し、出来事を表す動詞はこれらの副詞と共起することができる。

- (18) John {always/often/sometimes} works on the weekend.

次の例が示すように、中間態構文は頻度を表す副詞と共起可能である。

- (19) a. This bread rarely cuts smoothly. (Condoravdi 1989: 19)  
 b. The dress {often/regularly} zips up. (Rosta 1995: 135)  
 c. This bread usually cuts smoothly. (Zwart 1997: 4)  
 d. Math books will never read easily for me. (Stroik 1995: 167)

第三に、結果の二次的述語との共起について考えてみよう。結果の二次的述語は主動詞が意味する過程 (process) の結果として生じる状態を表す働きを持つ。したがって、結果の二次的述語が生起する構造では、それが表す状態に至る状態変化の意味が含まれることになる。このことは、結果の二次的述語を含む動詞句は状態ではなく出来事を表すということを意味している。したがって、中間態構文に結果の二次的述語が生起できるならば、中間態構文のアスペクトは出来事的であるということになる。そして、実際、結果の二次的述語は中間態構文に生起できる。

- (20) a. These dishes wipe dry easily. (Levin & Rapoport 1988: 285)  
 b. My running socks won't wash clean. (Carrier & Randall 1989: 31)  
 c. This bread cuts into thin slices easily. (Hale & Keyser 1987: 11)

中間態構文における結果の二次述語の生起可能性について, Levin & Rapoport (1988) は興味深い事実を指摘している。彼女らは文法的な中間態構文を得るために結果の二次述語が必要とされる場合があることを示した。たとえば, 上記 (20a) の文から結果の二次述語 *dry* を除くと非文が生じる。

- (21) \*These dishes wipe easily. (Levin & Rapoport 1988: 285)

同様のことは以下の例にも見られる。

- (22) a. This kind of meat pounds thin easily. (Levin & Rapoport 1988: 285)  
 b. \*This kind of meat pounds easily. (Levin & Rapoport 1988: 285)  
 (23) a. The door kicks down easily. (Levin & Rapoport 1988: 285)  
 b. \*The door kicks easily. (Levin & Rapoport 1988: 285)

これらの例は, 中間態構文においては状態変化の意味が含まれていることが必要であることを示している。*wipe*, *pound*, *kick* は活動を表す動詞であって, 状態変化の意味を含まない。しかし, これらの動詞を結果の二次的述語と共に用いると, 動詞句全体としては状態変化 (の使役) の意味を持つようになる。この違いが与えられると, (21), (22b), (23b) の不適格性は, これらの文では中間態構文において要求される状態変化の意味がどこからも与えられないことによると説明することができる。一方, (20a), (22a), (23a) が適格であるのは, 中間態構文が要求する状態変化の意味が二次的述語の存在により保証されるためである。このことは, 中間態構文の動詞句が出来事を意味していることをはっきりと示していると言える。

最後に, 期間を表す前置詞句との共起可能性について見てみよう。よく知られているように, 英語には状況の継続を表す *for* 句と状況の完結を表す *in* 句とがある。一般に, *for* 句は状態や活動を表す動詞と共起するのに対し, *in* 句は達成や遂行と共起する。以下にその例を示す。

- (24) a. 状態: Max liked Susan {for/\*in} an hour. (Van Valin & LaPolla 1998: 96)  
 b. 活動: Mary talked {for/\*in} ten minutes. (Van Valin & LaPolla 1998: 96)  
 c. 達成: The window shattered {in/\*for} a fraction of a second.  
 (Van Valin & LaPolla 1998: 96)



d. 遂行: The apple dissolved in the acid {in/\*for} an hour. (Jackendoff 1996: 310)

この二つの前置詞句の生起が動詞の語彙的アスペクトの点から見てこのような分布を示すのは、状態と活動を表す動詞は意味の中にそれらの終結点を内在的に含まないのに対し、達成と遂行を表す動詞の意味にはそれらの終結点が含まれていることによる。

動詞と *for* 句, *in* 句との生起可能性についてもう一つ触れておきたい点がある。動詞が統語的な内項 (internal argument) を持つ場合, その内項の役割を担う名詞句の属性によって活動を表すか, 達成を表すかが変わる場合がある。たとえば, 動詞 *read* は統語的に内項を伴わない場合には, 活動を表す。

(25) Bill {read/sang} {for/\*in} five minutes. (Jackendoff 1996: 333)

また, 統語的な内項を伴う場合でも, それが数や量に関して限度を持ったものを表していなければ, 同様に活動が表される。

(26) Bill {read fiction/sang opera} {for/\*in} five minutes. (Jackendoff 1996: 333)

ところが, 限度の定まった数量を持ったものを表す統語的な内項を伴う場合には, 文は活動ではなく遂行の意味となる。

(27) Bill {read the paper/sang the tune} {in/??for} five minutes. (Jackendoff 1996: 333)

これは, 統語的な内項が数量の限度が定まったものを指す時には, 活動がそのものの最後まで遂行された時に出来事が終結することになるためである。例えば, 一つの論文なら最後まで読んでしまうと, その論文を読むという出来事は終結する。したがって, そのような場合には, (動詞自体が活動を意味するものであっても) 動詞句全体では遂行を表すことになる。

では, 中間態構文は *for* 句あるいは *in* 句のいずれと共起可能であろうか。もしこの構文においては動詞自体が状態であるなら, *in* 句との共起は起こらないことが予測されるが, 実際には中間態構文に *in* 句が生起できる場合がある。

(28) a. A good tent puts up in about two minutes. (van Oosten 1977: 459)

b. Your kitchen counters will wipe clean in a jiffy! (Fellbaum 1986: 5)

- c. This book reads in no time. (Klingvall 2003: 9)
- d. Every shipment of her new book sold out in a single day.

これらの文を見ると、中間態構文が終結的な出来事を表現できることがわかる。そして、このことは中間態構文のアスペクトが状態的と特徴づけるだけでは十分でないことを示している。

前節で見たように、確かに中間態構文が状態的であることを示す事実群が存在する。その一方で、この節でここまで見てきたように、中間態構文が非状態的な性質を持つことを示す事実もいくつかある。これら二つのことを矛盾なく捉えるためには、英語の中間態構文は(単節の構造を持っているにもかかわらず)そのアスペクトが二重性を備えているという分析をする必要があると考えられる。実際、次の文は、中間態構文のアスペクトは二つのレベルで指定されていることを示している。

- (29) *For the first few months after it was released, each shipment of her new book sold out in a single day.*

上の例では、*for* 句と *in* 句が一つの文の中で共起している。この事実は、この種類の構文の意味表示が複雑な二重構造を備えていることを示している。一つのレベルでは、この構文は出来事を表しており、それを埋め込んだより高次のレベルでは、そのような出来事を引き起こす性質が主語名詞句が表すものに備わっているという状態が表されている。したがって、(29) の文は次のようにパラフレーズすることができる。

- (30) Each shipment of her new book had the property for the first few months after it was released such that it sold out in a single day.

英語の中間態構文が上で見たような二重構造を持つことの理由は、この構文を支える概念化のパタンに見出すことができる。中間態構文で表されている意味は主語名詞句が備えていると認識される属性である。たとえば、*This bread cuts smoothly* という文では主語名詞句の指示するパンが滑らかにカットできるという属性を備えていることを表している。しかし、この属性は、例えば大きいとか白いといった静態的な属性とは違い、行為の中で知覚される動態的な属性である。言い換えれば、中間態構文により表される属性は時間の経過に沿って行為が展開されていく中で経験されるものである。この動態的な認識が中間態構文の非状態的な

意味に反映されていると考えられる。

#### 4. 結論

英語の中間態構文には状態的な意味を持っていることを示す特徴が見られるが、同時に、出来事的な意味の特徴も見せる。この一見背反する事実は、中間態構文の意味表示が二重構造をしており、各レベルで異なるアスペクトを持っていると考えることで解決することができる。また、中間態構文がこのような重層的な意味構造を持っていることを示す事実も存在する。中間態構文がこのような複雑なアスペクト構造を備えているのは、この構文と結びついている概念化に基づいている。この概念化では、行為の中で知覚される動態的な属性が物体の内在的な属性として認識される。

\*この小論を東洋女子短期大学の思い出と日高佳先生に感謝してお届けしたい。

#### 注

- (1) この論文に至る調査の段階で Giffn Glen 氏, John Young 氏にインフォーマントとしてご協力いただいた。なお、当然のことながら、本論中のすべての誤りは筆者に帰されるべきものである。
- (2) 例(2)に挙げられている例は中間態構文が状態的(stative)であるというだけでは説明できない。下の例が示すように、状態を表す文は瞬間的な過去の時点を表す副詞句との共起が可能である。
  - (i) He was a full-grown man when I was born. (Carlson 1981: 37)
 ただし、この場合でも、表されている状態(の期間)が副詞句の指定する時点に完全に包含されているという解釈にはならない。したがって、(2)の不適格性は、中間態構文が特定の一時点を指定する副詞句と共起していることよりも、この構文が表す状況(situation)がその時点だけに限定されるという解釈を与えていることに起因すると解釈する方が適切である。
- (3) ただし、単純過去時制の動詞を持った中間態構文の例が多く見られる(van Oosten 1977: 470, Fellbaum 1986: 4, Stroik 1992: 131, 高見 1993: 125f, Rapoport 1999: 152, Iwata 1999: 534, 本多 2005: 70ff)。Greenspon (1996: 52)は、出来事読みを持つ過去時制動詞を含む中間構文の適格性については、多数の話者が適格と判断するものの、それを非適格と判断する話者もいるという観察を述べている。類似の指摘は Rosta (1995: 137)にも見られる。
- (4) ただし、中間態構文は進行形でも用いられる場合があるという観察が示されている(高見 1993: 127, Rosta 1995: 137, Iwata 1999: 534)。どのような場合に中間態構文に進行形が可能になるかについては、現在のところ筆者には分からない。
- (5) ほかの要因は統率(government)および統率を阻止する障害の不在である。Roberts (1987)は時間的に依存している(temporally dependent)という関係を次のように定義している。
 

X is temporally dependent on Y iff Y governs and is considered with X and there is no Z such that governs X and is coindexed with X but does not govern Y. (Roberts 1987: 198)

Robertsはこの関係を用いて動詞のアスペクトについて次のような原理を立てている。

  - a. A verb which is temporally dependent on Tense has an event reading. (Roberts 1987: 198)
  - b. A verb which is not temporally dependent on Tense has a state reading. (Roberts 1987: 198)
  - c. Stative verbs cannot be temporally bound to anything. (Roberts 1987: 201)
- (6) 状態を表す述語の中にも頻度の副詞と共起できるものがあることは事実である。たとえば、

- (i) When I drink I always get quite loud, and *sometimes naked*.

では、*naked* という状態を表す形容詞に頻度の副詞の一つである *sometimes* が共起している。ここで問題となるのは中間態構文が状態的な意味を持つという時に、どのような意味で状態的であるかということである。ここではその問題に立ち入ることはしないが、中間態構文の状態性が *tall* と *naked* のどちらに似ているかという点について次の例は示唆的である（例 (iii) と (iv) はそれぞれすでに挙げた (7b), (7a) と同じ例を再掲）。

- (ii) I saw Mary naked.

- (iii) \*I saw Mary tall.

- (iv) \*I saw the floor wax easily.

このような事実に基づいて中間態構文が個体レベルの述語 (individual-level predicate) として扱われることがあるが、Marelj (2004) はそのような扱いには疑問が残るとしている。

#### 参考文献

- Carlson, Lauri. 1981. Aspect and quantification. In Philip Tedeschi and Annie Zaenen (eds.), *Syntax and Semantics*, volume 14: *Tense and Aspect*, 31-65. New York: Academic Press.
- Carrier, Jill and Janet Randall. 1989. *From Conceptual Structure to Syntax: Projecting from resultatives*. ms. Harvard University and Northeastern University.
- Condoravdi, Cleo. 1989. The middle: where semantics and morphology meet. *MIT Working Papers in Linguistics* 11: 16-30.
- Dowty, David R. 1979. *Word Meaning and Montague Grammar: The semantics of verbs and times in generative semantics and in Montague's PTQ*. Dordrecht: Kluwer.
- Fellbaum, Christiane. 1985. Adverbs in agentless active and passive. *CLS 21, part 2, Papers from the Parasession on Causative and Agentivity*, 21-31.
- Fellbaum, Christiane. 1986. On the middle construction in English. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Foley, William and Robert Van Valin. 1984. *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Greenspon, Michael. 1996. *A Closer Look at the Middle Construction*. Ph.D. dissertation, Yale University.
- Hale, Ken and Jay Keyser. 1987. A view from the middle. *Lexicon Project Working Papers* 10. Cambridge, MA.: Lexicon Project, Center for Cognitive Science, MIT.
- 本多啓 2005 『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』 東京 東京大学出版局
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: University Cambridge Press.
- Iwata, Seizi. 1999. On the status of an implicit arguments in middles. *Journal of Linguistics* 35: 527-553.
- Jackendoff, Ray. 1996. The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification in English. *Natural Language and Linguistic Theory* 14: 305-354.
- Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper. 1984. On the middle and ergative constructions in English. *Linguistics Inquiry* 15: 381-416.
- Klingvall, Eva. 2003. Aspectual properties of the English middle construction. *Working Papers in Linguistics*, volume 3. The Department of English in Lund University. (<http://www.englund.lu.se/content/view/45/99/> より入手)
- Lakoff, George. 1970. *Irregularity in Syntax*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Levin, Beth and Tova R. Rapoport. 1988. Lexical subordination. *CLS* 24: 279-289.
- Marelj, Marjana. 2004. *Middles and Argument Structure across Languages*. Proefschrift Universiteit Utrecht.
- 中右実 1991 「中間態と自発態」『日本語学』10: 52-64.

- Roberts, Ian. 1987. *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*. Dordrecht: Foris.
- Rosta, Andrew. 1995. 'How does this sentence interpret?' The semantics of English mediopassives. In Bas Aarts and Charles F. Meyer (eds.), *The Verbs in Contemporary English*, 123-144. Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, Carlota. 1972. Jespersen's 'move' and 'change' class and causative verbs in English. In M. Jazayery, E. Polome, and W. Winter, (eds.), *Linguistic and Literary Studies in Honor of Archibald Hill*, vol. 2: *Descriptive Studies*, 101-109. The Hague: Mouton.
- Stroik, Thomas. 1995. On middle formation: a reply to Zribi-Hertz. *Linguistic Inquiry* 26: 165-171.
- 高尾享幸 2001 「英語の中間構文と主観的イベント」 未刊行
- 高見健一 1993 「中間態, 可能態と『特徴づけ』」 *Ars Linguistica* 1: 121-141.
- Tenny, Carol. 1987. *Grammaticalizing Aspect and Affectedness*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Tenny, Carol. 1994. *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht: Kluwer.
- van Oosten, Jeanne. 1977. Subjects and agenthood in English. *CLS* 13: 459-471.
- Van Valin, Robert and Randy LaPolla. 1997. *Syntax: Structure, Meaning and Function*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Voorst, Jan van. 1987. *Event Structure*. Amsterdam: John Benjamins.
- Zwart, Jan-Wouter. 1997. On the generic character of middle construction. ms. University of Groningen.